

しばらく黙り込んでいる二人

中嶋男に酒を作ってやる

中嶋「聞きたいか？」

マー「いえ」

中嶋「ききたいだろっ？」

マー「いえ」

中嶋「聞きたいって顔してるぞー！」

マー「そんな事は」

中嶋「正直に言えば話してやる」

マー「はい、聞きたいです」

中嶋「ほら、聞きたいんじゃない？」

マー「ほら」

中嶋「……………出て行った……………」

マー「……………」

中嶋「……………」

マー「それだけ？」

中嶋「??それだけで十分だろう、他に何が聞きたい？」

マー「いや、ずいぶんもったいぶるから、もう少し詳しく話してもらえるのかと思っちゃった」

中嶋「聞きたいか？」

マー「??？」

中嶋「詳しく聞きたいか？」

マー「ほら」

中嶋「正直に言ったら話してやる」

マー「はいつていつてるじゃないですか」

中嶋「長くなるぞー！」

マー「もう〜長くても何でも良いから早く話してくだせよ」

中嶋「しょうがない話してやるかー！」

マー「いや、話したいんでしょー！本当はー！」

中嶋「まっな

マー「めんどくさいわいさな〜、早く話してくだせよ」

中嶋「……………」

マー「なに……………はやく〜」

中嶋「いや、どこから話せば良いかなと思ってな」

マー「どこからでも良いから早く聞かせてよ」

中嶋「なんだよ、興味津々だな？」

マー「もうめんどくせ〜な〜、早く話してよ」

中嶋「わかった、では出会いの場面から話すとするか。」

マー「うん」

中嶋「康世はな、あ〜康世って言うのは女房の名前ね」

マー「解るよそんな事は」

中嶋「なんで解るんだよ！娘かもしれないだろ！」

マー「ほんとめんどくせ〜」

中嶋「めんどくせ〜って何だよ！もう良いよ話をさない！」

マー「いやいや、すいませんお願いです話してください。」

中嶋「……………」

マー「お願いします」

中嶋 渋々話し始める。

中嶋「康世はな元々俺のツアースタッフだったんだよ。制作のお手伝いと言う事で俺のツアーには全部ついてきてたんだ。ちょっと控えめでそれでいて気だてのいい女の子でな、彼女がいるとそれだけで場が和むというかいるだろ？そう言う女の子！」

マー「は〜」

中嶋「あれはかれこれ20年ぐらいい前になるかな、ある地方のステージが終わった後、彼女が飲みに行きませんかと誘ってきたんだよ。今までそんな事一度も無かったし打ち上げとかやっても、次の日の準備が有るからといって断るような真面目な女の子だったんだよ。ま〜俺もその日のステージでちょっとしたミスをしてな。それを慰めてくれようとしたんだろうな。」

マー「どんなミスしたんですか？」

中嶋「……………歌の歌詞をすべて忘れてな、全部ラララで歌ったんだ。」

マー「え〜っ！それってちょっとしたミスって次元じゃないでしょ！大失敗ですよ」

中嶋「そうだよ！すまないよ大失敗だよ！さだまささんの北の國からじゃ無いんだから全部ラララなんてありえないだろ〜！」

マー「ですぬ」

中嶋「ま〜それで落ち込んでる俺を見かねて誘ってきたという訳だ。」

マー「……」

中嶋「そのときに言われたんだよ……、すべて完璧にできる人間なんていません。もしミツちゃんすべて完璧にできる人だったらつまらないと思います。完璧な歌を聞きたいならCDを聞いてたら良いんだし、今日のお客さんには良い思い出になったんじゃないですか？だってあの歌をラララで聞ける事なんてもう二度と無い訳ですから。私だったらそんなステージを観れたってだけですごい得した気分になります。だって、いつどこで観ても全く同じだったら面白くないでしょ、ライブなんですから、生なんですから毎回違うんですよ……」

マー「……ふん……」

中嶋「気づかされたよ、それまでの俺はお客さんは同じお金払って観に来てくれるんだから毎回、きちんとした完璧なものを見せないと思って思っていたからな、でも違ったんだよ、地方に行ったら地方のカラーがあるし、途中のトークなんかもその土地に合ったトークをしないと行けないとか構成もいく場所場所を変えるのも有りなんだとな……」

マー「サプライズの事？」

中嶋「そう！それ以来行く先々でのライブの構成を全部康世に相談するようになってな、毎晩毎晩二人で明日はこうしよう、ああしようとかやってるうちに何となくそんな関係になっていった。二人の間に子供ができたというのもあって、結婚した。それと同時に俺は事務所をやめて独立して個人事務所を作ったという次第だ……以上」

マー「え？」

中嶋「え？」

マー「あゝ、まだ出会いしか聞いてませんけど」

中嶋「まだ何か聞きたいの？」

マー「いや、出会いよりもむしろなんで出て行ったか？そちらの方が聞きたいのですがね？」

中嶋「なんで出て行ったかなんて俺にも解らないよ！解らないから困ってるんだろ！悩んでんだろ！馬鹿かお前！」

マー「はいすいません。でいつ出て行ったんですか？

中嶋「10年前、俺はライブツアーに出てたんだよ、デビュー20周年の記念のライブでな、全国43都道府県を回るというツアーだったんだ。その頃は康世は子育てに追われてたからツアーには同行しなかったんだ。北は北海道から南は沖縄まで、3ヶ月間家を空けてたんだ。それでツアーが終わって帰って来たら全てなくなっていた。娘も家もお金もすべてだ！家に至っては売りに出されてた。」

マー「なんで？」

中嶋「だからなんでかは俺が聞きたいんだよ！」

「マ―」そんないきなり全てなくなるなんてないでしょー！だいたいツアーの途中とかで電話とかしなかったんですか？」

中嶋「してたよ！毎日！宿に帰ると必ず電話して娘にも代わってもらって、近況を報告し合ってたよ！」

マ―「そのとき気づかなかったんですか？なんか様子がおかしいとか？」

中嶋「気づかないよ！電話では楽しそうに話してくれるんだから！娘なんかパパの歌が大好きだからまたお家に帰って来たら歌ってね？早く帰って来て〜って言ってたんだからさ。康世だって後何日だね！頑張ってるねと毎晩言ってくれてたんだよ！それが家に帰るともぬけの殻だったんだから！！！」というか家の中にも入れなかったんだから！」

マ―「家にも入れないって？」

中嶋「鍵が代えられた！おまけにクレジットカードやキャッシュカードも全て止められてたんだよ……………もつ何がなんだか解らなかったね！」

マ―「……………」

中嶋「携帯に電話してもでない、行き先も解らない、もうどうしようもないだろう！」

マ―「警察には？」

中嶋「行ける訳無いだろう！中嶋満だよ！紅白歌手の中嶋満が奥さんがいなくなりましたって警察に泣きつくのか？会社の金を全て持って逃げられましたと……………そんなことしたらマスコミの格好のネタになるだろ！」

マ―「スキャンダルですね。」

中嶋「そうだよ！自分でなんとか探し出すしかないだろ！ま〜幸い別の隠し口座に300万ほどあったから当面はその金でやりくりしてな……………」

マ―「隠し口座！すごいな〜へソクリみたいなもんですね」

中嶋「まーな」

マ―「その後の仕事は？」

中嶋「ツアーが終わったら家族でのんびり旅行にでも行こうと思ってたのでその先の仕事は全て断ってたんだよ！しかもスケジュールの管理は全て康世がやっていた」

マ―「え〜〜もうダメじゃないですか」

中嶋「そうだよ、ダメだよ！康世が家を出て行った瞬間から俺の全ては終わったんだよ」

マ―「……………なんて言ってよいか解りませんがとにかく災難でしたね。」

中嶋「うむ」

マ―「それでここに住み着いたという訳ですか？」

中嶋「まーな、仕事も全て無くした俺はこのアパートにすみながらバイトをして空いてる時間を利用していろんなところで歌を歌っているという訳だ」

マー「でも歌ってて気づかれたりとかしないんですか？」

中嶋「最初の頃はな、でも今じゃ全くだ、お前だって俺の事なんか誰だか解らなかつただろう」

マー「すいません」

中嶋「謝る事無いよ！それが現実だ！」

### しびしの間重い空気

マー「でもすごいな〜」

中嶋「……………」

マー「だってそれでも歌い続けてるって、よっぽど歌が好きなんですね」

中嶋「そうでもない……………」

マー「えっ？？？？じゃ〜何で歌い続けてるんですか？」

中嶋「……………」

マー「だって好きじゃなかったらそんな状態になってまで歌い続けたりしないでしょ」

中嶋「……………」

マー「ミッチャんは歌が好きなんだって」

中嶋「娘だよー！」

マー「ん？」

中嶋「娘がどこかで聞いてくれればと思って歌い続けてるんだよ。」

マー「娘さんですか」

中嶋「あの娘はな、産まれる前から俺のメロディーを聞いているんだよー！」

マー「……………」

中嶋「康世のお腹の中にいるときからずっと俺の作るメロディーを聞いているんだ、そして今で

も俺のメロディーはあの娘の体の中にDNAの一部として構築されているはずなんだ。

彼女の魂には俺のソウルが遺伝してるはずだ。何より娘はパパの歌が大好き、一番好きだよ！って言ってたんだよ。だ〜い好きだぞ、だ〜って伸ばして言ってくれたんだぞ！伸ばすってことはよっぽどってことだろ！という事はだよ、初めて聴く歌でも俺の

作った歌なら体が勝手に反応する。そしてその曲を辿って俺の元に戻って来てくれる、そう信じてるから俺は歌い続けてるんよ」

マー「え〜〜〜っ、そんなにうまくいきますかね〜」

中嶋「いくー絶対にいくーそのためにも俺は歌を歌い続けてなおかつヒットさせなくちゃいけないんだよーお前だって子供の時に聴いた歌はいつまでも覚えてるだろうー似たような

歌聞くと懐かしい気分になるだろうー！」

マー「はー、まー」

中嶋「それと同じだよー！」

マー「……」

中嶋「何だよ？」

マー「で、毎晩毎晩がちゃがちゃやってるってことですか。」

中嶋「がちゃがちゃっていつなー！」

マー「あーすいません。じゃーちょっと聞かせてもらえますか？」

中嶋「えっ？聞いてくれるのか？」

マー「えー、ミツちゃんの歌がちゃんと娘さんの心に響くのか気になるからね。」

中嶋「……」

マー「歌ってよー！」

中嶋「えーいま？」

マー「今歌わないでいつ歌うんでっか？」

中嶋「いまでしょー！……」

マー「ぶるっ！今時それ使う人いないでしょー！」

中嶋「ふ、ぶるいのか……」

マー「いいから早く歌ってくださいよ」

中嶋「いや、ほらもう夜中だしさこんな時間に大声出して歌うとご近所に迷惑になっちゃうか

らよ……」

マー「何言ってるんですか！毎晩毎晩隣近所の迷惑考えないで大声で歌ってるくせに！」

中嶋「いや、まーそっただけだよ、いざこっ構えられるとなんかさー……」

マー「なに？」

中嶋「照れるじゃん……」

マー「もー何言ってるのよ、さっき聞いてくれてたじゃんよー！」

中嶋「あっ、じゃーさーデモでレコーディングしたCDが有るからそれ聞いてよー！」

マー「もう、何でも良いから早くー！」

中嶋 CDデッキを取り出して来て掛ける。

前奏が流れる

前奏を聴いた瞬間、マーは中嶋に何か言おうとするが

中嶋は目を瞑りしっかり曲を聴いている

仕方なく一緒に曲を聴く

「もういぢぢ」

流れた月日を今日も 指折り数えて思う

一人迎える朝の 陽射しが胸を打つ

微笑み僕を見つめる テーブルの写真今も

冷めた心の中に ぬくもりをもたらす

君と暮らした あの街並 すべて

変わり果てた今もまだ

君と誓ったあの夢 追いつづけ

信じているよ いつか僕のもとへと 戻ってくれと

信じているよ どこか遠いところから 僕の全てを 見守っていてくれと

マー、デッキの再生を止めて

マー「えっとささ、」

中嶋「ん？」

マー「みっちゃなんて演歌歌手だったんだ！」

中嶋「ん？違うよーなんで？」

マー「だってこれ演歌でしょ？」

中嶋「え？演歌？これが？違うよ！ポップスだよ！なんで演歌なの？」

マー「えくくくポップス？うそくん、これどう聞いても演歌だよ！だってこの曲のイントロとか完全に演歌でしょ！こりやダメだよ！いやなんかメロディーはさ、良いなと思うんだけどさ、はじめにあの地味な感じで始められちゃうとさ、ちょっと聞きづらいな〜って、なんかさ、気持ちがこう暗くなっていったらうんだよね」

中嶋「……」

マー「歌詞だつてささ、なんかものすごいネガティブじゃない？過去引きずり過ぎだし、これじゃ娘さんが聞いても私のお父さんだって言いたくないよな！うん俺だったら絶対他人のふりするなく、若さが無いもんなく！！」

中嶋「まじでー！」

マー「まじだよ！なんでこんな風になっちゃったの？」

中嶋「なんでといわれても……聞きやすいかなと思って」

マー「は〜もう全然解ってないな！これじゃ絶対最後まで聞いてくれないよー」

中嶋「そんな事言うなよお前、せつかく作ったのにさ、え〜どこが悪いのよ〜どこが後ろ向きなのよ〜」

マー「う〜ん、メロディー以外全部！」

中嶋「全部って！そんな！」

マー「いや、だからメロディーは良いんだって・・・アレンジって言うの？もう少しなんとかなんないの？それと歌詞！なによ！信じているよ〜って、何これ？女々しいな〜！男なんだからさもつとがつんといかないと！たとえばさ、帰ってこいよとかさ、戻ってこいみたいなさ〜」

中嶋「めめし〜、〜、〜」

マー「ミッチちゃん男でしょー！」

中嶋「は〜。」

マー「だったらさ、もっとこ〜う唄っばいのにしてよ！演奏もね〜、あ〜そ〜うだロックー！」

中嶋「ロックー？」

マー「そう、ロックーだよ！スタローン！知ってるでしょ〜。」

中嶋「知ってるけど、何でロックー？」

マー「ロックーって強いじゃんー」

中嶋「ん？〜？」

マー「ロックーは強い！倒されても倒されてもくじけないで立ち向かっていくじゃん！それで最後は絶対勝じゃん・・・ミッチちゃんもさ、家族に逃げられたからって暗くなってるやダメなんだよ！もっとこ〜う俺はくじけないぞ！お前たちを必ず取り返すぞ！みたいな気持ちでぶつかっていかなくちゃー！」

中嶋「・・・」

マー「これはさ、俺の持論なんだけど、女性って言うのは女々しい男に幻滅するんだよ！何かこ〜う男らしくく〜い〜い引張ってくれる人に引かれるんだって！」

中嶋考え込む

するとドアがノックされる

続く